

地域子育て支援拠点研修事業〈大阪開催〉

〈開催概要〉

■開催日 平成26年12月7日（日） 10:00～16:30

■会場 クレオ大阪中央4階セミナーホール

■主催 一般財団法人こども未来財団
NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会

■後援 （社福）全国社会福祉協議会・大阪府・大阪市

■参加者数 138名（女性131名、男性7名）
（行政9名、NPO/任意団体116名、その他団体/企業9名、その他4名）

〈プログラム〉

■主催者挨拶

安藤 哲男さん 一般財団法人こども未来財団 常務理事



■プログラム1

あらためて地域子育て支援拠点事業の4つの基本を考える

- ◆こどもが育つ環境づくりとは？
- ◆大人にとっても居心地のよい拠点とは？
- ◆拠点におけるプログラムのありかたとは？

【コーディネーター】坂本 純子さん NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長
NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事

【事例報告】 赤迫 康代さん NPO 法人子ども達の環境を考えるひこうせん 代表理事
渡邊 和香さん NPO 法人女性と子育て支援グループ・pokkapoka 代表

地域子育て支援拠点事業の基本4事業「①交流の場の促進②相談・援助③子育て関連情報の提供④講習の開催」について、配布したガイドラインも活用しながら、事例報告や会場参加者からの実践紹介と共に確認した。



<事例報告>

◆赤迫 康代さん NPO 法人子ども達の環境を考えるひこうせん 代表理事

子どもと大人がともに成長できる良い環境をめざし、「くるみの森」を交流拠点として活動しているひろばについて報告。4つの基本事業の「交流の場の提供、交流促進」と「講習の開催」が密接に繋がっているという視点からこの2つについて詳しく説明した。

交流の場である築100年の古民家が、屋内、屋外のそれぞれの特性をいかした子ども主体のノンプログラムの遊びの場であり、子ども達を見守る大人たちのつながり、心の交流をサポートする場であること。また、プレママから思春期までのさまざまな親のサロンを実施、参加することによって、より子どもの発達を知り親同士の意識の共有化が図られ、みんなでみんなの子どもを育てる環境に繋がっていると述べた。



◆渡邊 和香さん NPO 法人女性と子育て支援グループ・pokkapoka 代表

安心して安全に子どもを生き育てることができる地域づくりをめざし、助産師という専門的な強みをいかしたひろば運営を報告。

誰でもこれのような関わりや声かけ、対象を定めた交流の場、出張ひろばや小学生ボランティア体験による交流促進、スタッフや助産師による相談、フェイスブック等の活用や地域と連携した情報提供、子育てや仲間づくりに繋がる講座の実施や企画、各種スタッフ研修への参加ならびに情報の共有化について例示、説明した。

スタッフには、5名のメインスタッフの他、子育て中のスタッフも配置していて、参加者がひろばへ参加しやすい雰囲気をはかっていることも述べた。



【会場からの参加者からの実践紹介】

◆吉田 ひとみさん 大阪いずみ市民生活協同組合（ほのぼのルーム大矢船）

大阪いずみ市民生活協が市の委託を受けて運営しているひろば。年2回開催している0歳～1歳の同学年同学区の子と保護者、妊婦さんを対象としている「パッピータイムで新規さん交流会」について、その効果（孤立した育児からの開放、産前産後の不安緩和等）や課題（企画に参加されなかった人への働きかけ等）を紹介した。



◆境 和子さん ポラリス（交野市子ども家庭サポーターの会）

毎月3回のさまざまなイベントの中から「おしゃべり会」を紹介。参加者同士が自然な形でお互いを知る交流の場ととらえている。スタッフが気をつけていることは、参加者一人一人にとって安心安全の場であるように見守ること。また、参加者同士が出会い学びあえるピアサポートのきっかけになればと語った。



◆宮本 弘子さん NPO 法人ふらっとスペース金剛

情報提供の工夫について、①ひろばによく来る人（チラシ等を見やすく、わかりやすく、手に取りやすい工夫）、②最近ひろばに来ていない人（ひろばだよりや年賀状の利用）、③ひろばに来られない人（ホームページやフェイスブックの活用）、④ひろばを知らない人（4ヶ月健診時での声かけ）と情報を受ける側を4つに分けて紹介した。



■プログラム2 基調報告

「地域子育て支援拠点の概要と展望」

国からの最新情報を提供いただいたあと、会場との質疑応答も行った。

【講師】 竹林悟史さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長

【質疑進行】 坂本純子さん NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長
NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事

子育ての孤立化や不安・負担感などの課題を抱えるなか、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流を通じて子育ての不安・悩みを相談できる場を提供する地域子育て支援拠点事業について、平成27年度に子ども・子育て3法が施行されることに伴い、新たな事業展開が求められている。

これら法律による新制度は、都市部・過疎地それぞれの事情に応じた保育サービスを維持し、認定こども園制度を改善して参入しやすくし、親の働き方にかかわらず単一の施設で、個々のニーズに合った質の高い支援を受けられることを目指している。具体的には、消費税率の引き上げを財源として0.7兆円を確保し、地域子育て拠点を1万箇所に拡充することとしている。先般、消費税率10%への引き上げ延期が決まったが、極力予定している事業を実施していきたいと考えている。

新制度は、市町村子ども・子育て支援事業計画と利用者支援事業を車の両輪として位置づけている。利用者支援事業の役割は、誰もが抱えている子育てに関する漠然とした不安・疑問などに対して、相談・助言を行うことによって、具体的かつ現実的な施設や制度を利用できるようにすることである。親子・家庭・地域の個別のニーズを丁寧に拾い集めて、提供されるサービスとマッチングさせることで、より実効性の高いものとし、地域で支援活動されている皆様と共に、子育ての環境をよりよいものとしていきたいと考えている。



■プログラム3 講義

地域子育て支援拠点におけるソーシャルワークとは

社会福祉の中でもソーシャルワークがご専門の倉石先生をお招きし、地域子育て支援拠点事業と利用者支援事業が一体的に運営されていくために必要な視点や、地域子育て支援拠点で取り組むソーシャルワークの可能性について学んだ。



【講師】 倉石 哲也さん 武庫川女子大学教授

子育て支援におけるソーシャルワークとは、すべての子育て家庭を対象とし、ニーズに対応しながら子育てに関する心理・社会的問題について情報を収集し、アセスメントを実施し、保育・子育て支援サービスを提供することであり、チームワークと人材育成は不可欠となる。そして、利用者の代弁者として行政に提言し、制度の改革も目指したい。

子育て支援におけるソーシャルワークの3本の柱は、①個別的な支援活動（ケースワーク）、②親や子どもとのグループ活動を通じた支援（グループワーク）、③地域の子育てニーズへの支援とサービスの開発（コミュニティワーク）であり、この3本柱が歯車のようにかみあって回ることが必要である。

利用者が自分の能力に気づいていくことで、利用者に役割を与えていくエンパワーメントも必要である。親同士が話し合い、学びあうグループ活動を促進するプログラムを開発する上では、あるとうれしいもの（Demands）と欠けると困るもの（Needs）の見極めが支援者には必要である。また、地域の専門機関、活動団体、専門職などを日常的に把握することが重要である。

拠点の支援者に求められる技能は次のとおり。利用者さんとの対話を通して、話を確認して要約し、聞いてもらえて良かったと思ってもらえるような積極的傾聴のカウンセリング技能。相手の長所を見つけ、肯定的に意味変換を行い、できているところを評価（リフレーミング）し、エンパワーメントしていくソーシャルワーク技能。地域の支援的関係をお互いにメリットのある関係にデザインするコーディネート技能。波長を合わせて促進を行うファシリテーション技能などである。具体的にどんな方法があるか、どんな声掛けが効果的で望ましいかなどを伺った。

これからの地域子育て支援拠点の機能は、利用者のニーズを把握し支援方法を開発するための活動、地域を支援するためのアウトリーチ型活動、困難ケースへ対応するための活動、保育ニーズの把握などのコーディネート機能が必要になる。これらは、利用者支援事業を拠点で進めていくことへ繋がっている。地域子育て支援拠点は、利用者にとって一番身近で行きやすい場所と思われるが、利用していない困難家庭を地域子育て支援拠点がどう見つけ出し、支援していくかが課題である。

■プログラム4 パネルディスカッション

「寄り添う、広げる、深める」～親子にとって身近な場での支援～

事例を紹介いただきながら、地域子育て支援拠点を核とした利用者支援事業について考えました。

【コーディネーター】 岡本 聡子さん NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事
NPO 法人ふらっとスペース金剛 代表理事

【パネリスト】 倉石 哲也さん 武庫川女子大学教授
山下 裕美さん (社福) 大阪水上隣保館ファミリーポートひらかた
センター長
徳谷 章子さん NPO 法人ハートフレンド 代表理事

（事例報告1）山下 裕美さん（社福）大阪水上隣保館ファミリーポートひらかた

センター長

拠点センター事業としてファミリーポートひらかたとファミリーポートさぶり村野の2か所の拠点を運営している。利用者支援事業に焦点を当て事例を発表。3歳になった子どもたちのグループ体験の場で、子ども2人を連れのお母さんの表情からしんどさに気付く。寄り添って話を聞くと、困っていることが整理された（個別相談）。同じ悩みを持つお母さんを集め「子育てフォーラム」を企画し、専門家も入ったグループ活動へ繋げた。当事者同士の話し合い、お互いの体験談を聞くことで、最初は悩みを言い合うだけだったが、前向きな発想「できること探し」にたどり着く。さらに、サークルへ発展。現在は前向きな情報交換ができ、共感できる仲間となっている。



ひろばだからこそできること、共通項を見つけるサポートやきっかけ作りができた。利用者が、自分で乗り越えていける力をつけていくよう支援している。利用者支援事業として予算はついていないが、親子のために行うケースワーク、グループワーク、コミュニティワークなどの利用者支援を担っていると云える。

（事例報告2）徳谷 章子さん NPO法人ハートフレンド 代表理事

乳幼児から高齢者までつながる町づくりを目指した活動は、子育て支援事業から始まり、子ども、中学生、おとな（高齢者の居場所づくりとして子どもを見守るボランティアが地域資源になっていく）のてらこや、障がい児のデイサービスと多岐にわたっている。地域の中での子育て支援への応援団を増やしていくために「子育てフォーラム」の連続開催、高齢者のための「おとなのてらこや」の開催、小学校や中学校への「親力アップ講座」「命の授業」の企画の持ち込みなど工夫を重ねてきた。乳幼児親子がひろばだけでなく生活の場所での生活力を高めていけるようなサポートや乳幼児から中学生までの継続したサポートを実施していきたい。そのためには、日頃から地域の大切な資源（既存団体、行政、学校、地域の人）との顔の見える関係を創っておくことを大切にしている。今後は、スタッフの寄り添う力、つなぐ力のスキルアップ、新しい人材の確保、地域の中の応援団を増やすことを目標としていきたい。



（パネルディスカッション）

◆倉石さん

ひろばで険しい表情に気付いたとき、お母さんの不安を受け止め、同じようなことに不安を感じているお母さんを集めてみる、そんな発想やアイデアをいかに持てるかが重要。そうした予防的視点を大切にしたい。

また、皆さんは、やっていることをもっと行政にアピールしていく必要がある。そのためには、効果測定を継続的に行い、アンケートを数値化し、利用者の声を代弁してほしい。またパブリックコメントにおいても、データを使って問うことが有効になる。

利用者支援事業では、ハートフレンドが課題としてあげている、専門的なスキルの習得、人材の確保、子育ての応援団をさらにふやすことが大切と考えられる。

◆徳谷さん

新しいことを始めるときは、困難もつきまといますが、あきらめない力で進めていくことが大切。ひろばは、日常的に行きやすい場所として、相談をうけることもでき、生活全体を支えることができる強みがある。継続は力なりということ。

◆山下さん

予防的視点を常に大切にしていきたい。ひろばならインフォーマルな情報も提供できる。

行政にひろばの重要性を説明した際、長年取りためてきたアンケート結果を見せることで理解してもらえたことから効果測定の大切さを実感した。10年間の活動をまとめていきたい。利用者支援事業の予算はつかなくても困っている人のために活動し喜びを感じたい。

◆岡本さん

行政や関係機関と連携していく時に、お互いの共通言語の違いを知って、適切な言葉を使い、思いを伝えていくことが大切になる。なぜ拠点が利用者さんにとって一番身近な場所なのか？日常的な場での相談がなぜ大切なのか？を考えたとき、親子の生活全体を支えるのに身近にアクセスできる強みを持っていることがあげられる。

「地域子育て支援拠点研修事業」は9年間で72か所で開催されてきた。こども未来財団には、子育てひろばの始まりから支えていただいたことに感謝したい。これから地域子育て支援拠点は、今までにない専門性とスキルが求められていくので、今後も何らかの形で研修は続けていきたい。

